

令和3年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－1号)

農林総合研究センター
令和3年5月18日調査

気象経過

< 平年対比 >

【平均気温】

- ・ 4月上旬は、金沢は高く、輪島は並だった（平年差：金沢+1.2℃、輪島+0.2℃）。
- ・ 4月中旬は、金沢、輪島ともに高かった（平年差：金沢+0.6℃、輪島+0.4℃）。
- ・ 4月下旬は、金沢は低く、輪島はかなり低かった（平年差：金沢-0.4℃、輪島-1.6℃）。
- ・ 5月上旬は、金沢は並、輪島は高かった（平年差：金沢+0.3℃、輪島+0.7℃）。

【日照時間】

- ・ 4月上旬は、金沢、輪島ともにかなり多かった（平年比：金沢149%、輪島146%）。
- ・ 4月中旬は、金沢は多く、輪島は並だった（平年比：金沢113%、輪島103%）。
- ・ 4月下旬は、金沢はかなり多く、輪島は多かった（平年比：金沢129%、輪島120%）。
- ・ 5月上旬は、金沢は並、輪島ともに少なかった（平年比：金沢88%、輪島89%）。

【降水量】

- ・ 4月上旬は、金沢、輪島ともに並だった（平年比：金沢113%、輪島92%）。
- ・ 4月中旬は、金沢、輪島ともに多かった（平年比：金沢125%、輪島142%）。
- ・ 4月下旬は、金沢はかなり多く、輪島は多かった（平年比：金沢221%、輪島135%）。
- ・ 5月上旬は、金沢は並、輪島はかなり少なかった（平年比：金沢105%、輪島52%）。

【1ヶ月予報】

5月13日発表の1か月予報（5月15日～6月14日）では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は高い確率80%、2週目は高い確率60%、3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

生育概況等

【育苗】

1. 播種は3月末から開始され、出芽揃いは概ね良好であった。4月上中旬は気温が平年より高く、下旬は低くなったものの、日照時間は平年より多く経過したことから、苗の生育は概ね順調となった。
2. 苗丈は、コシヒカリは平年と比べやや短く、ゆめみづほはやや長く、ひやくまん穀は近年並みであった。第1鞘高長は、コシヒカリは平年並、ゆめみづほは平年と比べて長く、ひやくまん穀は近年より長くなった。
3. 乾物重は、コシヒカリで平年に比べ重く、ゆめみづほとひやくまん穀は平年及び近年と比べてやや軽くなった。充実度もコシヒカリが平年より高く、ゆめみづほは平年より低く、ひやくまん穀は近年と比べやや低くなった。

【本田の生育】

1. 田植始期は、加賀地区で4月28日、能登地区で4月30日、田植盛期は、加賀地区で5月4日、能登地区で5月6日となり、県全体の田植盛期は5月5日と平年並で、前年より2日遅くなった。
2. 田植後は好天に恵まれ、活着及び生育は概ね順調である。
3. 草丈は、コシヒカリは平年並、ゆめみづほは加賀地区は短く能登地区は長い、ひやくまん穀は近年と比べて加賀地区でやや短く能登地区で長くなっている。

コシヒカリ	：加賀	101%	能登	109%	県平均	104%
ゆめみづほ	：加賀	86%	能登	111%	県平均	93%
ひやくまん穀	：加賀	91%	能登	114%	県平均	100%

4. 葉数展開は、コシヒカリとひやくまん穀で平年並～近年並となっているが、ゆめみづほでは加賀地区で平年に比べ0.3葉少なく、能登地区では0.4葉多くなっている。
- | | | | |
|--------|----------|---------|----------|
| コシヒカリ | ：加賀±0.0葉 | 能登±0.0葉 | 県平均±0.0葉 |
| ゆめみづほ | ：加賀-0.3葉 | 能登±0.4葉 | 県平均+0.1葉 |
| ひやくまん穀 | ：加賀-0.2葉 | 能登+0.1葉 | 県平均-0.1葉 |

5. 分げつの発生は、田植えの早いほ場（4月下旬～5月初旬）で確認されている。

【病害虫の発生状況】

イネミズゾウムシ、イネゾウムシによる食害が一部の地域で散見されている。雑草地における斑点米カメムシ類の生息数はやや多となっている。

当面の対策

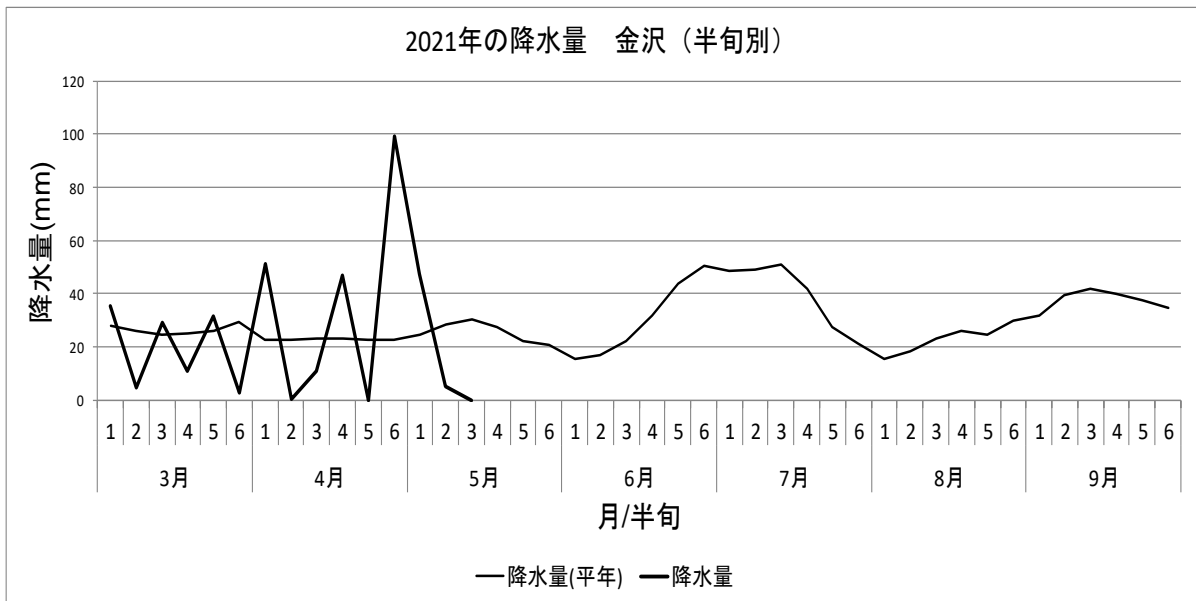
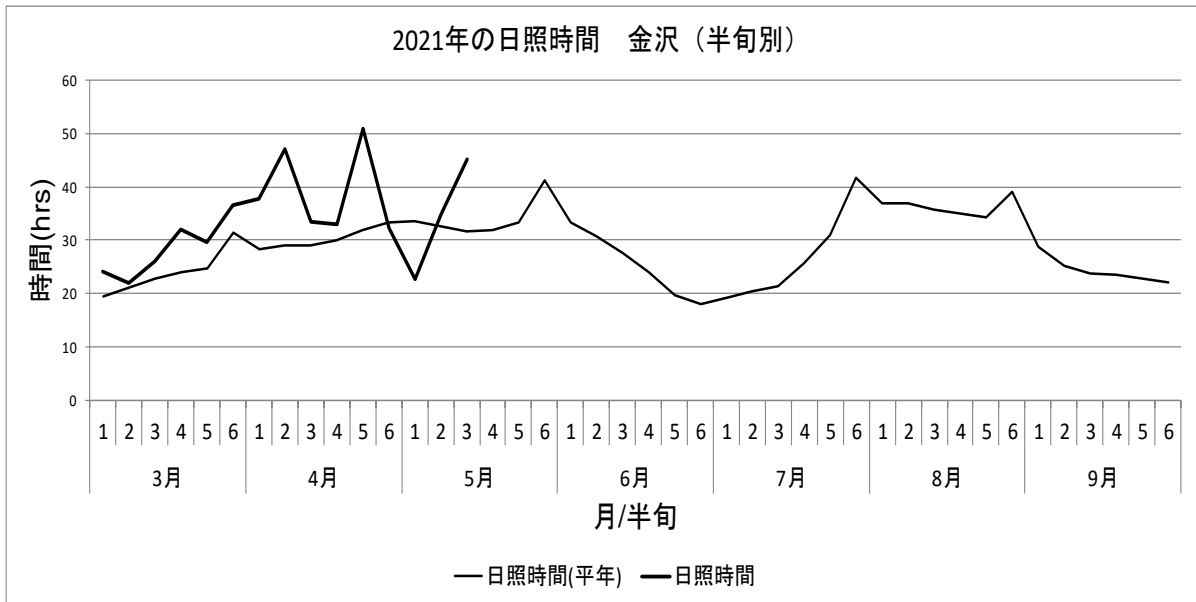
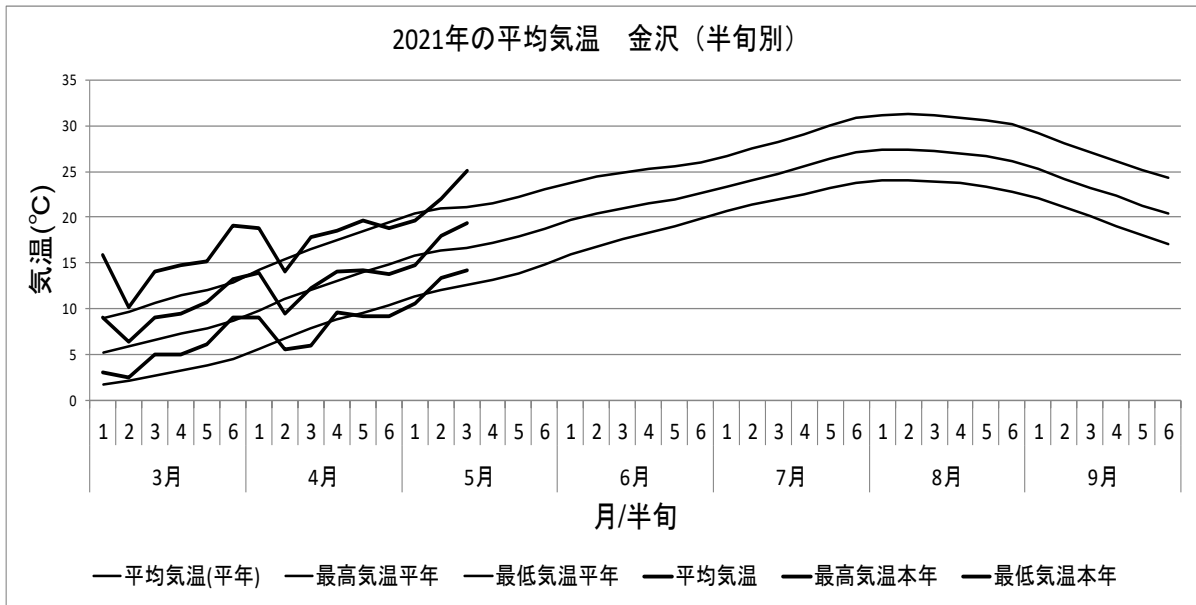
【本 田】

1. 活着後は浅水管理により、良質分げつの確保に努める。
特に、5月19～25日の一週間は日照時間が少ないと予想されることから、浅水管理を徹底し、地温を高めるよう努める。
2. 用水が豊富な地域では好天時には**田干しを必ず行う。**
 - (1) 土壌中のガスを取り除き、**根の健全化**を図る。
 - (2) **中期除草剤散布前**には**必ず田干し**を行ない、**稲体の軟弱化を防止**する。
 - (3) **藻や表土剥離**が発生していると、分げつの発生が抑制されたり、中期除草剤の効果期待どおり得られなかったりする場合があるため、**直ちに田干し**を行う。
3. 用水をため池等に依存している地域では、集落や地域単位で限られた水源の計画的な利用に努める。なお、関係機関との連携を密にし、ため池の状態を継続的に把握する。
4. 今後、気温が高くなることが予想されており、ノビエ等雑草の発生が早まる恐れがあることから、本田除草剤を適正な時期に遅れずに散布する。なお、除草剤散布後7日間は落水や掛け流しをしないこと。
5. 中干し開始は、田植後1ヶ月を目安に行うが、生育の早い圃場では目標茎数（目標穂数の約70%、1株当たり コシヒカリ：13～15本、ゆめみづほ：15～17本、ひやくまん穀：12～14本）に達したら田植後1ヶ月を待たずに直ちに開始する。

【病害虫】

1. 補植苗の本田放置は、葉いもちの発生源となるので早急に取り除く。
2. イネミズゾウムシの防除（箱施薬）をしていない場合は、成虫が1株当たり0.3頭以上認められたら、湛水状態で粒剤散布により防除を行う。
3. イネドロオイムシの防除（箱施薬）をしていないほ場では、1株当たり1卵塊以上認められたら、湛水状態で粒剤散布により防除を行う。
4. 斑点米カメムシ類の発生を防止するため、生息場所となる農道、畦畔、休耕田及び遊休地等の雑草地の除草を徹底する。
なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。

気象経過グラフ（金沢気象台）



気象経過グラフ (金沢気象台)

